OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	「新勅撰集」雑四の配列について
Author(s)	西畑, 実
Citation	語文. 1965, 25, p. 60-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68563
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「新勅撰集」雑四の配列について

西畑実

勅撰集の編纂事業というのは、撰歌をはじめとして、部類・配列の順に進行する。なかんずく、配列は極めて厄介な作業であり、『新古今集』がこの難事をものの見事に克服して、勅撰集中きわだって芸術的効果を挙げていることは故風巻景次郎博士の夙に説かれたごとくである（『新古今時代』）。しかるに、この撰定に携った藤原定家が後年単独で撰んだ『新勅撰集』のそれについては、前者に劣らぬほどの配慮が払われているにも拘わらず、殆んど論及されていないようである。

『新勅撰集』の撰述過程において、定家の蒙った政治的掣肘に少なからざるものがあったことは既にいわれている通りであり、殊に作品取捨の最終的決定権は九条道家が掌握していたために（『越部禅尼消息』『百錬抄』）、前代に比して非常に権門的色彩が濃厚なことは否めないであろう。とはいえ、定家が勅撰作者の資格として堪能・重代たることを重視していること、しかも、選歌の上に定家の情実が強く反映していること（特に、権門、武家歌人において著しいが）などから推して、選歌の権限は一往定家に属していたと考えてよい。かような権能でさえ相当強固なのだから、まして、選択した作品をいかに分類し配列するかという、いわば事務的な手続に定家の志向が全面的に投影していることは容易に認めることができよう。『明月記』にしばしば記されているごとく、『新古今集』の撰定方針に反撥を感じていた定家が、勅撰集というもののあり方を規定せんとする意欲に燃えて撰進したこの『新勅撰集』は、前代の撰集の影響を多分に受けながらも、序文の形式や部立・部類において、努めて新機軸をうち出そうとしている。その典型として「雑歌四」の巻を採り上げてみることにしたいと思う（なお、底本は「岩波文庫本」に拠る）

この巻の内容は「名所歌および離別歌」と説かれている（「岩波文庫本」の解題）。しかし、そこに問題がないわけではない。一三三三番の

かぜふけばゝまゝゝつがえのたむけぐさつゆばかりこそぬさとちるらめ

には歌枕が詠み込まれていないのである。だが、この歌は『万葉集』（『新古今集』にも入る）の「白波の浜松が枝のたむけぐさ幾世までにか年の経ぬらむ」を踏んでおり、同じくこれからの本歌取りたる一三三二番の

みくまのゝうらわのまつのたむけぐさいくよかけきぬなみのし

らゆふ

の次に置かれていることから、この作との類歌という関係で並べられたものと思われる。つまり、「雑歌四」は地名と類題との両方の基準を併用したと見られるのである。これを整理すれば次のような表になる。

第一欄（番号）は底本として採用した「岩波文庫本」の番号、第二欄（歌枕名）はその歌に詠み込まれている歌枕の名称である（一三三三の項におけるそれを括弧で括ったのは推定の境に留まることを示す）。第三欄（所在）にはそれらの属する国名が記してある（所在地について問題のある名所もなくはないが、一往『八雲御抄』に従っておいた。）第四欄（属性）は歌枕の性質から見て、山に縁ある場合を山類、水に関係ある場合を水辺と定め、それぞれ山もしくは水と略記した。第五欄（部類）は作歌事情を考慮のうえ、これを三段に分かち、第一段に四季（括弧を附したのは用語によってそう判断せられるけれども、もともと四季の歌として作られたものでないことを現わす）、第二段に、離別、羇旅、祝、恋、哀傷、述懐、懐旧の別を注し、それらの部類に入らないときは第三段に雑と記しておく。例えば、一二七六の「いにしへのいくよのはなにはるくれてならのみやこのうつろひぬらん」は、暮春の歌らしく思われるが、実は雑歌なのである。第六欄（素材）の降、聳はそれぞれ降物、聳物を指す。

番号	歌枕名	所在	属性	部類	素材
一二六五	大内山	山城	山	雑	聳
一二六六	久世騭坂	山城	山		
一二六七	瓶原・久邇京	山城		懐旧	
一二六八	伏見・櫃川橋	山城	水	雑	
一二六九	常盤杜	山城			
一二七〇	常盤杜	山城		秋	降
一二七一	常盤杜	山城		(秋)	雑降
一二七二	飛鳥川	大和	水	(秋)	雑降
一二七三	見馴川	大和	水		恋
一二七四	佐保川	大和	水		恋
一二七五	吉野山	大和	山		雑降・聳
一二七六	寧楽京	大和		(春)	雑
一二七七	三笠山	大和	山	秋	
一二七八	伊駒山	大和	山	春	聳
一二七九	住吉岸	摂津	水		羇旅
一二八〇	住吉	摂津			恋
一二八一	住吉浦	摂津	水		羇旅
一二八二	難波潟	摂津	水		羇旅
一二八三	長柄橋	摂津	水		恋
一二八四	芦屋里	摂津		(夏)	雑
一二八五	布引滝	摂津	山		

一二八六	神南備杜	摂津		秋			降
一二八七	伊勢海	伊勢	水		羇旅		
一二八八	伊勢海	伊勢	水		恋		
一二八九	鈴鹿山	伊勢	山	(秋)		雑	降
一二九〇	壱志浦	伊勢	水	春			
一二九一	然菅之渡	参河	水		羇旅		
一二九二	佐夜中山	遠江	山	秋			
一二九三	佐夜中山	遠江	山	秋			
一二九四	浜名橋	遠江	水		離別		
一二九五	不尽山	駿河	山		離別		聳
一二九六	不尽山	駿河	山			雑	降 聳・
一二九七	不尽山	駿河	山			雑	降 聳・
一二九八	有渡浜	駿河	水		恋		
一二九九	足柄関・浮嶋原	駿河・相摸	山	(春)	羇旅		
一三〇〇	武蔵野・向岡	武蔵				雑	
一三〇一	葛飾・真間浦	下総	水			雑	
一三〇二	葛飾・真間継橋	下総	水	春			聳
一三〇三	筑波嶺	常陸	山		羇旅		
一三〇四	唐崎	近江	水	(春)	祝		

一三〇五	大嵩・鏡山	近江	山	秋			聳
一三〇六	朽木之杣	近江	山	春			降
一三〇七	朽木之杣	近江	山	春			
一三〇八	三上嵩・野洲川	近江	山・水		羇旅		
一三〇九	更級川	信濃	水		述懐		
一三一〇	木曽	信濃		秋			降
一三一一	浅間嵩	信濃	山		離別		聳
一三一二	玉川	陸奥	水		恋		
一三一三	笹嶋	陸奥	水		述懐		
一三一四	磐手山	陸奥	山		恋		
一三一五	末松山	陸奥	山			雑	
一三一六	松賀浦嶋	陸奥	水	秋			
一三一七	信夫山	陸奥	山	(秋)	恋		降
一三一八	宮城野	陸奥		秋			降
一三一九	白山	越前	山			雑	降
一三二〇	白山	越前	山	冬			降
一三二一	岩見川	岩見	水		恋		
一三二二	明石門	播磨	水	秋			
一三二三	鞆浦	備後	水		哀傷		

一三二四	虫明迫門	前備	水			恋		
一三二五	門司関	筑前	水		雑			
一三二六	由良岬	紀伊	水			羇旅		
一三二七	妹嶋・形見浦	紀伊	水			羇旅		
一三二八	吹上浜	紀伊	水	春			聳	
一三二九	吹上浜	紀伊	水			雑	降	
一三三〇	妹背山	紀伊	山	(春)		雑	聳	
一三三一	三熊野浦	紀伊	水			雑		
一三三二	三熊野浦	紀伊	水			雑		
一三三三	(三熊野浦)	紀伊	水			雑	降	
一三三四	淡路嶋	淡路	水	春			聳	
一三三五	淡路嶋	淡路	水	春			聳	
一三三六	志珂嶋	筑前	水			恋	聳	
一三三七	志珂嶋	筑前	水			雑		
一三三八	松浦海	肥前	水	春			聳	
一三三九	浅茅山	対島	山	秋				

これらの名所歌は決して恣意的に配列されている訳ではない。極めて厳重な統一性が与えられているのである。すなわち、各国ごとに群をなし、それがさらに大なる範疇に統合されており、概して畿内（山城・大和・摂津）、東海道（伊勢・参河・遠江・駿河・相摸・武蔵・下総・常陸）、東山道（近江・信濃・陸奥）、北陸道（越前）、山陰道（岩見）、山陽道（播磨・備前・備後）、南海道（紀伊・淡路）、西海道（筑前・肥前・対島）の順に並んでいるのである。ただし、伊駒山は『八雲御抄』に「通二河内国一。両国名歟」とあり、神無備杜は同抄に「大和、又摂津歟」とあるように、「雑歌四」における それらの所属は必ずしも明確ではないけれども、前者は一往大和と考え、また後者は配列から推して摂津と比定しておいた。

ところで問題になるのは一三二番より一三二六番に至る配列なのである。播磨・備後・備前・筑前・紀伊の順となっているのはいかにも不審だと思われる。ともに山陽道に属しながら備後、備前と並ぶのは不自然であるし、山陽道の国々と南海道のそれとの間に筑前（西海道）が挟っているのもいぶかしい。しかも、筑前の地名は一三三六・一三三七の二首にも詠まれているから、筑前の中に南海道諸国が割り込んで来たということになり、かたがた疑いは晴れないのである。統一性からいえば、一三二三と一三二四は次第を前後すべく、一三二五は一三三五と一三二六との間に置かれるべきであろう。そういう意味でこの「雑歌四」は配列にやや破綻を来たしているといえる。かかる現象は他の巻においても認められるところであるが、恐らく『百錬抄』の記事（文暦元年十一月九日の条）に見える「用捨」のためであろうと思われる。それはともかく、この巻における歌群の統一は大体緊密に保たれていると見られるのであって、『人丸集』の物名歌、『能因歌枕』『八雲御抄』の国の排列とほぼ一致していることは注目に価しよう。

このように「雑歌四」は「歌枕集」ともいうべき性格を備えているが、それに収められている歌は本質的に「名所歌」ばかりなので

はない。詞書を列挙するならば、

春浦月といへる心をよみ侍ける（一二九〇）

家に十五首歌よみ侍けるに、晩霞隔浦といへるこゝろをよみ侍ける（一三三四）

和歌所歌合に、海辺霞をよみ侍ける（一三三五）

百首歌よみ侍けるに、早秋歌（一二六九）

百首歌にもみぢをよみ侍ける（一二八六）

秋山鹿といへる心をよみ侍ける（一三三九）

百首歌たてまつりける雪歌（一三二〇）

といった四季の歌、

平兼盛するがのかみになりてくだり侍ける時、餞し侍とてよめる（一二九五）

しなのゝくにゝまかりける人に、たき物をくり侍ける（一三一一）

のような離別歌、

亭子院の御ともにつかうまつりて、すみよしのはまにてよみ侍ける（一二八一）

おなじみゆきに、なにはのうらにてよみ侍りける（一二八二）

伊勢国にみゆきの時よみ侍ける（一二八七）

ひたちにまかりてよみ侍ける（一三〇三）

伊勢勅使にて甲賀のむまやにつき侍ける日（一三〇八）

のごとき羇旅歌

天禄元年大嘗会悠紀御屏風歌（一三〇四）

の賀歌

謙徳公につかはしける（一二八三）

こひのうたよみ侍ける中に（一二八八）

寄露恋をよめる（一三一七）

の恋歌、

久遐のみやこのあれにけるを見てよみ侍ける（一二六七）

の懐旧歌、

陸奥守に侍りける時、忠義公のもとに申をくり侍ける（一三一三）

の述懐歌というふうに、他の部立に入れてもよさそうな歌をも含んでおり、神祇・釈教の部以外の各部立にわたる作品がこの一巻に集約されているのであって、単なる「名所歌および離別歌」の集団ではないのである。もとより、名所歌を採り入れた巻はこれに限らず（『新勅撰集』にはかような作品が四百首ばかり収められている）、また、この巻の歌枕が他の部立に見出されないというのでもないけれども（例えば、飛鳥川は「秋歌上」、「冬歌」、「雑歌三」に見える）、そのような歌だけを集めているという点で、「雑歌四」は甚だ特殊な巻になっているということができる。

こういう具合に、「雑歌四」はさまざまな歌を、しかも、統一的に配列しているのであるから、定家の苦心は非常なものであったと想像される。

いつとなくこひするがなるうどはまのうとくもひとのなりまさるかな

あしがらのせきぢこえゆくしのゝめにひとむらかすむうきしまのはら

これは、後者がたがいに所属の異なる歌枕（駿河、相摸）を二つ取り入れているのを利用して、前者（駿河）への接続を滑かにして

いるのである。

(イ) からさきのはまのまさごのつくるまではるのなごりはひさしからなん

(ロ) おほたけのみねふくかぜにきりはれてかゞみのやまに月ぞくもらぬ

(ハ) はるきてははなとかみらんをのづからくち木のそまにふれるしらゆき

(ニ) はなさかでいく世のはるにあふみなるくち木のそまのたにのむもれ木

(ホ) はるかなるみ神のたけをめにかけていくせわたりぬやすのかはなみ

(ヘ) いまさらにさらしながはのながれてもうきかげ見せむものならなくに

(ト) とくさかるきそのあさぎぬそでぬれてみがゝぬつゆもたまとちりけり

(チ) わするなよあさまのたけのけぶりにもとしへてきえぬおもひありとは

(リ) みちのくにありといふなるたまがはのたまさかだにもあひ見てし哉

(ヌ) あけくれはまがきのしまをながめつつみやこ恋しきねをのみぞなく

(ロ)から(ハ)への続き方には特に内容上の関連はないけれども、「鏡山」の鏡と縁のある「見る」という語を含む歌を持って来ることによって、連繋を密接にしようと意企しているのだ。同様にして(ニ)の「幾世」に(ホ)の「幾瀬」を続けている。そういう縁語関係は、なお、(ホ)の「目にかけて」と(ヘ)の「見せむ」、(ヘ)の「流れ(泣かれ)ても」と(ト)の「袖濡れて、」(ト)の「露」と(チ)の「消えぬ」においても見られるところなのだ。つまり、これらは類語意識によって並べられているのである。

しかし、(イ)から(ロ)、(チ)から(リ)、(リ)から(ヌ)への移り行きには、特に言語的な繋りは認められないし、また、等類の歌でもない。これらはいかなるところで結ばれているのであろうか。

(イ)は詞書に拠れば、大嘗会の屏風歌であり、「はるのなごりはひさしからなん」という表現に祝意が揺曳していると見られる。(ロ)は比叡山に登る途上の作であるが、「月ぞくもらぬ」の語句に、「曇りなき世」を観じて、つまり、政道が公明に行われているめでたさを見立てて、(イ)に連ねたのであろう。さすれば、この二首は祝言の気分のうえで微妙に繋っているといえよう。次に(チ)から(リ)への推移を見れば、(チ)の「としへてきえぬおもひありとは」に恋情を汲み取って(リ)を続けたのだと思われ、離別歌から恋歌への転じ方がいかにもなだらかになされている。更に(リ)から(ヌ)への続き方は、(ヌ)の「みやこ恋しきねをのみぞなく」に向かうと明らかになるであろう。こうして、四季から恋、恋から雑への移り変わりが実に滑らかになっているのである。これは連想による続け方と考えられる。

けれども、配列に際しての定家の苦心はこれのみに留まるのではないらしい。「雑歌四」の歌枕を仔細に検するに、山類(吉野山のごとき)、水辺(佐保川のごとき)、その他(杜・野・京など)に分かたれると思うが、山類、水辺がその大半を占め、その他は遥かに少なくなっている。だから、よほどうまく並べなければ、山類もしくは水辺がだらだらと続いて単調に陥りやすいであろう。巻頭から二十首めぐらいまでは起伏に富んでいるけれども、それ以後は概し

て山類と水辺とが交代しつつ進行してゆく。例えば、一三〇八番の歌は山類と水辺とによって挟まれているのだが、一首中に両者（三上嵩・野洲川）を含んでいるために、移り具合が極めて円滑になっているように思われる。定家は「雑歌四」の全歌を歌枕の所属および種類を考慮しながら、巧妙に配列することによって（すなわち、同類の連続を避けることによって）、読者をして倦ましめまいと試みていると見てもいいのではあるまいか。

次に注意されるのは、「雑歌四」の名所歌に雨、露、雪のごとき「降物」や霞、霧、雲、煙といった「聳物」が結びついているとき、その並べ方にある意識が作用していはしないかということである。一二六五（聳物）、一二八九（降物）のように一首だけで捨てている場合は問題ないけれども、それが二首以上にわたっている場合は、同じ類の歌を続けるか、あるいは降物と聳物とを交互に配置するかして、読者に強く印象付けようとしているかに見える。

ゆきかへりたむけするがのふじのやまけぶりもたちゐきみをまつらし

ふじのねはとはでもそらにしられけりくもよりうへに見ゆるしらゆき

世とゝもにいつかはきえむふじの山けぶりになれてつもるしらゆき

三首とも山類であるが、一首めに「煙」という聳物があり、二首め三首めにそれぞれ聳物（雲・煙）、降物（雪）があるので、抵抗感なしにこの推移についてゆくことができる。なお、一三〇五と一三〇六、一三一〇と一三一一においては、聳物と降物とを対比させつつ、芸術的効果を目指して、定家は細かい配慮を払っていることが窺えるのである。かような聳物と降物との並べ方は前代の勅撰集においても認められなくはないので、必ずしも『新勅撰集』独自のものとはいえないかもしれない。けれども、名所歌ばかりを集録した巻におけるかなり著しい現象だから、やはり「雑歌四」の排列の特色の一つに数え上げてもよろしいかと思うのである。

ところで、名所歌というものをある程度纏った形で採録しているのは、『古今集』（「雑歌上」）をはじめ、『拾遺集』（「雑歌上」）、『後拾遺集』（「雑歌四」）、『千載集』（「雑歌上」）、『新古今集』（「雑歌中」）など前代の勅撰集に例を見るところである。このうち、『新勅撰集』の編纂上、大きな影響を及ぼしたと思われる『後拾遺集』および『新古今集』において、名所歌はどのように位置付けられているであろうか。まず、『後拾遺集』では左のごとくなる（ただし、そこで詠みながら歌の中に出て来ない名所は括弧に入れてある）。

番号	歌枕	番号	歌枕	番号	歌枕
一〇四二	武隈	一〇六二	（筑摩湯）	一〇八二	朝倉
一〇四三	武隈	一〇六三	住吉	一〇八三	木丸殿
一〇四四	（河原院）	一〇六四	住吉	一〇八四	木丸殿
一〇四五	（河原院）	一〇六五	住吉	一〇八五	——
一〇四六	——	一〇六六	住吉	一〇八六	——
一〇四七	（六条殿）	一〇六七	住吉	一〇八七	——
一〇四八	——	一〇六八	住吉	一〇八八	——
一〇四九	——	一〇六九	住吉	一〇八九	——

一〇五〇	岩代	一〇七〇	住吉	一〇九〇	――		
一〇五一	――	一〇七一	――	一〇九一	――		
一〇五二	――	一〇七二	亀井	一〇九二	姨捨山・更級		
一〇五三	――	一〇七三	長柄橋	一〇九三	水無瀬川		
一〇五四	勝間田池	一〇七四	長柄橋	一〇九四	――		
一〇五五	須磨浦	一〇七五	長柄橋	一〇九五	――		
一〇五六	(龍門滝)	一〇七六	錦浦	一〇九六	――		
一〇五七	(龍門滝)	一〇七七	(音無川)	一〇九七	――		
一〇五八	――	一〇七八	――	一〇九八	蓑宇浦		
一〇五九	(大覚寺)	一〇七九	(賀茂社)	一〇九九	筑摩社		
一〇六〇	大井川	一〇八〇	(賀茂社)				
一〇六一	桂・月輪	一〇八一	賀茂社				

すべて名所歌なのではないし、また、名所そのものも山城、摂津など畿内に偏している嫌いはあるけれども、巻頭に武限の松を詠じた歌を配置している事実に象徴されるごとく、とにかく歌枕を中心に「雑歌四」を編成しようとする姿勢は認められるのではあるまいか。さすれば、『新勅撰集』における「雑歌四」の体制は『後拾遺集』を典拠としていると考えることができるであろう。

では、『新古今集』の「雑歌中」においてはどうであろうか。この巻の全歌のうちほぼ半数は歌枕を含み、それ以外の作も素材から見て山類と水辺とに大別される。巻頭から三十三首めまでの名所を表示すれば、

番号	歌名枕	所在	属性	部類	素材
一五八六	――	紀伊(詞書ニヨル)	水		羇旅
一五八七	岩田小野	山城			雑
一五八八	芦屋灘	摂津	水		雑
一五八九	(芦屋里)	(摂津)	水	(夏)	雑
一五九〇	志珂	筑前	水		雑 聳
一五九一	難波	摂津	水		雑 聳
一五九二	長柄橋	摂津	水		雑
一五九三	長柄橋	摂津	水	(春)	雑
一五九四	長柄橋	摂津	水	(秋)	雑
一五九五	難波潟	摂津	水		雑
一五九六	須磨浦	摂津	水	(春)	雑 聳
一五九七	須磨浦	摂津	水	(秋)	雑
一五九八	須磨関	摂津	水		羇旅
一五九九	不破関	美濃	山	(秋)	懐旧
一六〇一	明石浦	播磨	水	秋	
一六〇二	和歌浦	紀伊	水		雑
一六〇三	水江	丹後	水		雑

一六〇四	灘塩屋	摂津	水		述懐		
一六〇五	大淀浦	伊勢	水			雑	
一六〇六	住吉里	摂津				雑	
一六〇七	住　吉	摂津				雑	
一六〇八	吹上浜	紀伊	水	(秋)		雑	
一六〇九	田子浦	駿河	水	(秋)		雑	
一六一〇	塩釜浦	陸奥	水	春			聳
一六一一	壱志浦	伊勢	水	春			
一六一二	鈴鹿山	伊勢	山		羇旅		
一六一三	不尽山	駿河	山		述懐		聳
一六一四	不尽山	駿河	山		羇旅		聳
一六一五	不尽山	駿河	山		羇旅		降
一六一六	常磐山	山城	山			雑	
一六一七	吉野山	大和	山	(春)		雑	
一六一八	吉野山	大和	山	春			
一六一九	吉野山	大和	山	秋			

右表に拠れば、排列に際して歌枕の所在地を意識していることは認められるが、『新勅撰集』のような地理的統一性は与えられていない。にも拘わらず、山類と水辺との交替（『新勅撰集』に比して振幅は狭いが）、聳物と降物とに対する顧慮（同集におけるほどけざやかではないけれども）、本質的に名所歌ならぬものの撰入、歌から歌への移り行きに見られる類語の重畳などから推して、『新勅撰集』と類似しているところがあるのは確かであろう。

要するに、『新勅撰集』の「雑歌四」は体制の上で『後拾遺集』を、配列の面で『新古今集』を踏襲したと見られるのであるが、一巻全部を名所歌に割いたことは、全歌を国群別に統一したこととあい俟って、定家の編纂意欲に並々ならぬものがあったということが知られるのである。定家をしてこのような組織化に踏み切らせたのはなにかというに、当時歌枕に対する関心が高まっていたこと（『八雲御抄』など）にも拠るだろうけれども、多くは定家個人の好尚に帰せられるであろう。定家が名所に興味を抱いていたことは、その歌学書の一つなる『万物部類倭歌抄』の歌句に名所歌たることを注しているところがあり、さらに、本書に「古今名所」「源氏名所」が附載せられていること、また、藤原範兼の『五代集歌枕』に見える定家の消息に「又云、此物極至要物云々。又云、天下難レ得之重宝也云々」とあることなどから推すことができる。

かくして、「雑歌四」は他の勅撰集に例のない巻になっているのであるが、その配列の仕方を見るとき、類語もしくは連想による推移、山類水辺の交代、聳物降物の対比などからして、連歌の付合に近似しているということになるのではあるまいか。このような心使いは『新古今集』の「雑歌中」にも認められなくはないが、「雑歌四」が名所歌のみの集成であるだけに、よけいその観が深いのである。もとより、部類作業と懐紙を巻くこととは本質的に相違するために、連歌におけるがごとき厳密な法則は見出すべくもないにせよ、

（七四頁へつゞく）